

〔厚木市◎有限会社白井農産〕



今から遡ること約170年前、ペリー率いる黒船来航により横須賀の地にもたらされたものの1つに、養豚業があるといわれている。その始まりは一説には、横浜の居留地に住む外国人の食肉文化を支え、その需要に応えるために豚を飼い始めたことだとされている。さらに、相模原台地では富士火山灰質の水はけの良い土が堆積し、もともとさつまいもが広く栽培されていた。さつまいものツルなどの野菜屑は豚の飼料になる上に、豚を育てることでさつまいもの堆肥を採ることもできる。そのため、養豚はさつまいも農家の副業として神奈川県で栄えた。

しかし、農林水産省の畜産統計調査(令和4年)によると、全国での豚の

飼養戸数は近年減少の一途をたどっており、神奈川県もその例外ではない。畜産業では担い手の高齢化や後継者不足を背景に毎年一定数の経営離脱が続いており、新規就農の推進など労働者不足に向けた対策も叫ばれて久しい。そんな中、ICTを活用しおいしい豚肉づくりをめざしているのが厚木市の有限会社白井農産だ。

健康でおいしい豚肉の追求

創業して60年を迎えた厚木市の白井農産では、「幸せと笑顔になれる豚肉を」をテーマにこだわりの豚肉づくりを行っている。「豚肉の味には、豚の食べる餌が大きく影響する」と白井幹一社長は話す。そのため、飼料にもこだ

こだわりと創意工夫、飽くなきチャレンジが育むおいしい豚肉

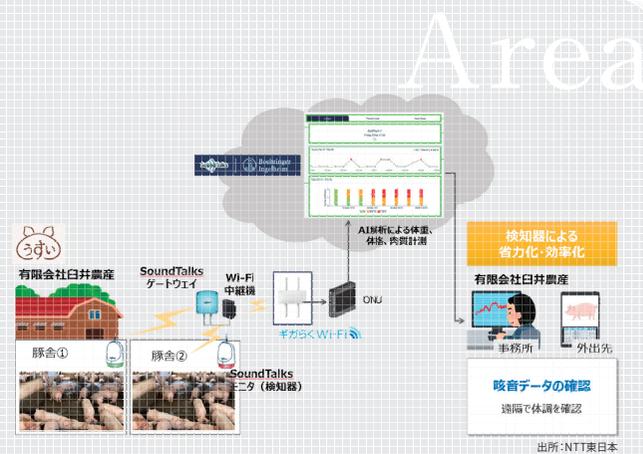


わり規格外農産物などを利用して製造される家畜用飼料であるエコフィードも自ら独自配合し豚肉の味を追求する。

しかし、おいしさのためには豚が健康であることも欠かせない。豚は繊細な動物であり、特に子豚の頃は抵抗力も弱く風邪などの呼吸器系の病気にかかることも多い。周囲への感染を防ぐとともに、発育にも問題が出ないように、体調を崩した子豚を早めに把握して手当てを行い、治療薬の使用を最小限に抑えて短い期間で治癒させる必要がある。このため、豚舎の管理者は豚の健康状態をこまめに把握することが求められる。一方、感染すると豚の殺処分が必要となる「豚熱」の感染経路には、人を介したウイルスの侵入も含まれており、その対策として人が豚舎内に入る機会を極力抑える必要がある。そこで、NTT東日本の紹介を受け導入したのが、豚の咳の音をAI(人工知能)で検知するペーパードインゲルハイム社のSoundTalksだ。

豚の健康の指標

豚舎内に埃が舞っていたり、極度の乾燥状態にあったり、また、呼吸器系の感染症にかかると、豚は「ゴホン」と聞こえる咳音を発することがある。しかし、豚舎の中響く豚の鳴き声やフェンスの金属音など無数の音の中から、咳音を聞き分けるには経験やスキルが必要になる。そこでSoundTalksの「AIによる



咳音検知技術」を使えば、豚の咳音を自動的に判別し解析することで農場独自の咳の発生状況を把握することが可能だ。担当者は遠隔地のスマートフォンまたはパソコンのウェブサイトを介して、また、豚舎内でもSoundTalksの集音器である「モニタ」に搭載されているLEDライトにより、咳音の多少や変化を視覚的に3段階(緑、黄、赤)で判別することができる。このように作業者個人のスキルや感覚に頼っていた作業に、デジタル解析による客観的な指標を導入することで、担当者の経験年数や勘にかかわらず豚舎の状況を正しく把握することが可能になり、急激な咳の増加に対して適切な対応を適切なタイミングで獣医師に相談できるようになる。白井農産では昨年末にSoundTalksを導入した。その間、飼育に関する他の工夫も重ねているが「豚の損耗率

は良くなっている」(白井社長)という。

こだわりと飽くなきチャレンジ

SoundTalks導入以前にも、白井農産ではNTT東日本が紹介したコンテック社が提供するAIカメラ「PIGI」による豚の体重・体格・肉質の計測ソリューションを導入するなど、継続してICTを積極的に活用し続けている。こうした取り組みの原動力については「こだわりを持って取り組みたいという思い」(白井社長)が話す。養豚業界を取り巻く環境は依然厳しく、価格の高騰に加え後継者問題や環境問題など課題も山積している。しかし、ICTの活用により、課題にアプローチすることも可能だ。「特区などの導入により新たなチャレンジも取り組みやすくなる」(白井社長)と、前向きに語る。飽くなきチャレンジを続ける養豚業界のバイオニアの取り組みから、今後も目が離せない。 1

「おいしいお肉をつくりたい」という信念のもと、
模索を続け進化を遂げる